

2021年1月20日

子どもの頃、お正月は何か晴れがましい、物事が一新するような気分になったものです。

年末は、障子紙を張り替えたり、畳を上げて天日干しをしたり、廊下を念入りに拭いたり家中の大掃除をしてお正月を待ちました。そして、一月一日の朝、家族であいさつを交わし、お雑煮やおせち料理を食べ、みんなでトランプやゲームをしました。

十八日の月曜朝礼では次のような話をしました。



(手話で) みなさん おはよう ございます。
お正月の気持ちを表した一つの詩を紹介します。
この詩は前に紹介した「もくれんの芽」という詩を書いた、星野富弘さんが作った詩です。

笑顔で挨拶を交わし

小さなことにもよろこび

嘘を言わず

悪口も言わず

全てのこと感謝し

人のしあわせを祈る

一月一日の気持ちを

皆がみんな

十二月三十一日まで

持ち続けていられたら

美しい国になる

星野富弘「花の詩画集・速さの違う時計」

(偕成社 一九九二年)

お正月には、家族や親せきの人に「あけましておめでとうございます。」とあいさつをします。近所に住む人や、お店の人にも「あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いたします。」などと、多くの人が笑顔で挨拶を交わします。そんな様子を見た人も多いのではないのでしょうか。いつもは当たり前のように思っていること、例えば、今、元気でいること、家族がいること、住む家があり、食べるものがあることなども、新しい年を迎え新鮮な気持ちになると、改めてうれしいな、ありがとうと感謝の思いがわいてきます。お正月からうそを言ったり、人の悪口を言ったりすると、せっかく新しい年、新しい気持ちになつたのに、なんだか自分の心が汚れてしまうような気持ちになるのではないのでしょうか。

また、人々は年賀状などに「新しい年の幸せをお祈りします。」と書いて、互いに相手の幸せを祈ります。私も皆さんからいただいた年賀状を読みながら、幸せな気持ちになりました。「足がよくなりますようにお祈りしています。」と何人もの人が書いてくれました。お祈りしてもらっていると思うと、うれしくなりました。そんなふうにお正月の挨拶や、人の気持ち、年賀状の言葉などを思い浮かべながら、星野さんはこの詩を作られたのだと思います。

そして、この気持ちをずっと持ち続けていられたら、笑顔があふれる、人の優しさがあふれる、「ありがとうございます。」という感謝の気持ちがあふれる「美しい国」になると、この詩を締めくくります。

私は、お正月になると星野さんのこの詩を思い出して読んでいます。そして、皆さんも、二〇二一年、新しい年になった今から、笑顔があふれるクラス、「だいじょうぶ、一緒にやろう。」という仲間の優しい言葉があふれるクラス、「ありがとう。」という感謝の言葉があふれるクラス、「ありがとうございます」という感謝の言葉が作ろうという気持ちを持ち続けていられたら、一人ひとりが大事にされる、安心できる楽しいクラス、星野さんの言葉を借りると「美しいクラス」になるのだと私は信じています。

(手話で) お話を 終わります。



数年前から聖書通読に挑戦しています。年を重ね一つ一つの話の意味が、若い頃よりも深く心に届き、胸にしみてきます。その中でも強く心に響くことは「人は神さまや人々への感謝の気持ちを忘れやすい。」というメッセージです。クリスチャンである星野さんから生まれた「持ち続けていられたら」という言葉が、強く胸に迫ってきます。本校を神さまが常に見守り、導いていてくださることへの感謝の気持ちをもち続けてまいります。

(立教小学校校長 佐々木 正)